

特集

舞踊のトポス
— 田園都市ヘレラウをめぐって

副島 博彦

すべての造形活動の最終目標は建築である！
……建築家、画家、そして彫刻家は、いくつもの
の手肢をもった建築の姿について、その全容と
諸部分とにわたって改めて知り把握することを
学ばねばならない。……旧来の美術学校は、こ
のような統一を生みだそうともしなかったし、
生みだせるはずもなかった。なぜなら、芸術は
教えるものではないからである。美術学校は
再び工房と一体とならねばならない。

ヴァルター・グロピウス

『ヴァイマル国立バウハウス宣言』(1919)

建築家ヴァルター・グロピウスがバウハウスを
構想したとき、彼の念頭には美術教育の改革が
あった。こうした教育改革はグロピウスの独創で
はなく、当時、既に各分野で潮流となっていたも
のだった。美術の分野では、イギリスのアーツ・
アンド・クラフツに由来する工芸工房の運動が、
20世紀入ると、ドイツで芸術と産業の統合とい
う視点で更新され、例えば、ドイツで新しく設立
された美術学校には工房が併設され、実習を中心
とした工房教育が採用される。そのなかでも際だ
つていたのが、アンリ・ヴァン・デ・ヴェルデによ
って1908年に設立されたバウハウスの前身ともい
えるヴァイマル工芸学校だった。また、その前年
には、ミュンヘンでドイツ工作連盟が設立され、
ヴァン・デ・ヴェルデやグロピウスも参加するこ
とになる。連盟の会長に就任したドレスデン工科
大学建築学教授テオドル・フィッシャーは、設
立総会でつぎのように演説している。「近代のポ
ジティヴな要素を犠牲にすることなく、過剰な物
質主義と合理主義による弊害に立ち向かう。もし、
現実的な精神を持ったアーティストと理想主義的
な企業家が一致すれば、その結果は、現代生活の
現実合った新しい文化的統合を体現する調和の
とれた文化を再び獲得することになるのです。」

この「現実的な精神を持ったアーティストと理
想主義的な企業家が一致」して、「新しい文化的
な統合を体現する調和のとれた文化」の実現を
目指したプロジェクトのひとつが、工作連盟のメン
バーたちによってドレスデン郊外に建設された田
園都市ヘレラウだったのである。そして、この田
園都市ヘレラウがドイツ表現舞踊の揺籃の地と
なったのは、ジャック＝ダルクローズと彼の音楽
教育改革の実践としてのリトミック学校がヘレラ

ウに誘致されたからだだが、そこには、リトミック
学校を誘致する構想力と、それを生み出す気運が
あったからだ。それだからこそヘレラウは総合的
な文化的求心力を持ち、その改革的な音楽教育の
方法が、ドイツで表現舞踊を、日本では舞踊詩を
生みだす端緒となり、伊藤道郎にロンドン・デ
ビューのきっかけを与え、さらには、ニジンスキー
が『春の祭典』の振付を完成し、そのためにディ
アギレフがスカウトしたリトミック教師マリー・
ランバート（ランベール）が、イギリスでモダン・
バレエの基礎を築くことにも繋がっていったので
ある。

19世紀後半のドイツでは、工業化とともに農村
部から都市部への人口が移動し、人口も増大す
る。遅れて工業化の始まったドイツは急速に農業
国から工業国へと変貌してゆく。この急速な工業
化、都市化、人口増大によって、都市では新しい
大衆文化が生まれる一方で、それまでの社会とそ
こに根ざした文化は解体していった。これに対し
て、あるいは、これによって生じた問題に対して
は、即応する問題解決の理念やプログラムが用意
されてはいなかった。無産者となった都市の労働
者、あるいは、財産を持つ市民層という新たな社
会の経験は、それまでの価値観では適応不可能な
ものだったのである。これがいわゆる19世紀から
20世紀への転換期の文化的危機と呼ばれるものだ。
1890年代に入ると、そうした状況を改革しよう
という様々な試みが様々な局面で展開され、やが
て生活改革運動と総称されるようになり、世紀転
換期にその盛期を迎えることになる。生活改革運
動は、反都市、反テクノロジーを標榜し、都市化、
工業化によって生じた諸問題に、「自然と結びつ
いた人間らしい自覚的な生活」を対置して、「自然
と健康によって、個と全体の調和という理想を
実現しよう」とするものだった。「自然に帰れ」
というスローガンに代表される自然志向は、ドイ
ツでも既に19世紀前半から、ルソーなどの啓蒙
主義思想の所産を取り込みながら、食事療法、水
治療法などの自然療法運動や、菜食主義運動、
栄養改革運動などを生み出し、やがて、日光浴、
大気浴、体操とともに生活改革運動の基本要素と
なっていた。例えば、自然療法を唱道する医師ハ
インリヒ・ラーマンが、ドイツで最初の自然療法
サナトリウム「白鹿」をドレスデン郊外に開設し、
日光浴、大気浴、食事療法などによる総合的な
自然療法プログラムを提供し始めたのは1888年の
ことだ。

生活改革運動は、都市の住宅・生活環境の改革
を目指す住宅改革、田園都市運動、労働者のため
の住宅建設を推進するジードウリング運動はじめ、
教育改革、ワンダーフォーゲルに始まる青少年運

動、婦人運動、服装改良、禁酒、女性のための体操、モダンダンス、ヌーディズム、自然保護など、多様なオルタナティブ運動を包摂していた。

こうした生活改革運動の潮流は、身体性の「復権」として括することもできるだろう。自然や身体によって方向づけられた反理性的な風潮がその出発点の背景にあったからである。身体へ意識を向けることは、自然療法、体操改革、ヌーディズム、モダンダンス、そしてダルクローズのリトミックによって目指された心身の「オイリュトミー」や「身体の再生」などと同じ文脈上にあったのである。また、生活改革運動では、知性を強調することに反対したニーチェの反理性的な世界観がいわば新しい教理として支持され、彼らの世界観の根拠として援用されていった。例えば、『ツアラトウストラ』の有名な「私が神を信じるなら、踊ることを知っている神だけを信じるだろう」という踊る人間の理想化は、新たに目覚めた身体性を理解する鍵となった。それは、立ち上がったばかりのイサドラ・ダンカンのモダン・ダンスの自己理解に寄与したばかりではない。ジャック＝ダルクローズのリトミックやルドルフ・ラバンのコーラス舞踊などでアマチュアを巻き込むことができたのも、そうした身体への覚醒を背景に、これらの運動の多くが、身体による「自己実現」という「生命力にあふれた、歴史上ユニークな近代のアイデンティティ」の形成というベクトルをもっていたからだ。後に、マリー・ヴィグマンがドレスデンで舞踊学校を開校したときのキャッチフレーズも若者たちの舞踊による「自己実現」だったのである。

こうした生活改革運動のもうひとつ特徴は、各々の運動の担い手たちが、共同体を模索しながら、各々が志向する身体イメージを結んでいったことである。生活改革運動のうちで比較的早く始まった菜食主義運動からは、1893年、チューリヒとベルリンの郊外で、各々の運動家たちによって菜食主義コロニーの建設がはじまる。チューリヒ郊外ビューラハに設立された「ハイムガルテン」の創設メンバー、フリードリヒ・フェレンベルクは、こう記している。「私たちの理想は、ますます進行する人類の退化と健康の蹂躪に対抗し、人々を都会から田園へ連れ戻し、自然な状態に回帰させることである」。また、例えば、田園都市運動から生まれたヘレラウではリトミックによる「現代人の非リズムの病」から回復した身体、モンテ・ヴェリタでは神秘主義的、エクスタティックな身体などのイメージが結ばれていったのである。さらに、オルタナティブな美術運動ドイツ表現主義のうちでは、例えば、1905年にドレスデンで結成された芸術家グループ「ブリュッケ」のメンバーの共同志向や、工業化都市化によって荒廃していない自然のなかに置かれた身体、原初的な身体、

あるいは踊る身体の称揚もこれにあてはまるだろう。

田園都市ヘレラウは、ドイツ工作連盟の結成に参加した家具工房主カール・シュミットと連盟の初代事務局長ヴォルフ・ドールンのイニシアティブでドレスデン郊外に建設された。エルツ山地に生れたシュミットは地元で徒弟時代を過ごし、北欧とイギリスを徒歩旅行してアーツ・アンド・クラフツ運動を実見したのち、1896年にドレスデンの工房でマイスターとなり、1899年に独立して「ドレスデン工芸工房」を設立していた。シュミットは、「昔の家具のコピーではなく、時代に即し、素材に合った形態で作る」ことを製作理念として掲げ、また、機械生産を取り入れた工房は、ムテジウスなどによって高い評価を受けていた。いっぽうドールンは、ナポリで臨海研究施設を運営する生物学者を父に生れ、1902年からミュンヘン大学で国民経済学を学んだ。同じゼミには、のちのドイツ連邦共和国初代大統領テオドル・ホイスや社会自由主義の開拓者でワイマール憲法の起草者となるフリードリヒ・ナウマンがいた。ドールンは、彼らとともに政治運動に加わり、また、政治・文学・芸術週刊誌「救済」の編集に携わった。ペーター・ベーレンス、リヒャルト・リーマーシュミット、ハインリヒ・テッセノウ、テオドル・フィッシャー、ヴァルター・グロピウスなどの建築家や、「救済」の購読者だったシュミットとの繋がりができたのもこの頃だ。弁舌と交渉能力に優れていたドールンは、1907年、工作連盟の事務局長に迎えられ、また、「有限会社ドイツ工芸工房」となったシュミットの工房の代理人兼副社長を務めた。

この頃500人を越える職人を抱えていたシュミットは、手狭になった工房の移転先を探し、郊外のヘラー川沿いの丘陵地に眼をつけていた。この単なる家具工房の移転計画が、ドールンの構想力と、当時の生活改革運動の気運によって、田園都市建設へと変貌し、さらに、それが20世紀初めの舞台芸術史上の一大トポスとなっていったのである。ドールンは、リーマーシュミットの助言を受けながら、シュミットとともに田園都市の計画を進め、1908年、エベネザー・ハワードに倣って『田園都市ヘレラウ』を刊行し、「有限会社田園都市ヘレラウ」を設立、資金協力者を得て140ヘクタールの土地を買収する。また、ドレスデンから北上する路面電車をヘレラウまで延伸する決議も議会から得た。

田園都市ヘレラウは、建築・芸術監督委員会、田園都市会社、住宅組合の三つの組織によって運営された。田園都市の計画・監督を行なう建築・芸術監督委員会には、ムテジウス、フィッシャー、リーマーシュミットら工作連盟の錚々たる建築家

が名を連ねている。用地は、ドイツ工芸工房が入る工場地域、小住宅地域、邸宅地域など五つの区域にゾーニングされ、各ゾーンでは正方形の区画が排除され、生活道路、一般道路、並木道の幹線道路が大部分曲線で引かれた。「健康で美しくかつ廉価な住宅を建設・維持し、職場を創出する」ことを定款で謳う田園都市会社は、道路、広場、公共施設、規模の大きな住宅を手がけ、ヘレラウの地権者となって地価の上昇を抑えた。住宅組合は、当時の労働者の平均年収の約4分の1にあたる200マルクの出資金で組合員を募り、住宅を建設し賃貸した。各住宅は、組合員（入居予定者）との話し合いで設計され、例えば、2～6人の子供のいる年収1,000～2,000マルクの家族の場合、年間家賃240マルクで、最低3寝室に、独立した入口、階段、100～200平米の庭を備え、共用の浴室、洗濯場が確保されるなど、当時の労働者用住宅としては、非常に恵まれた居住環境を提供していた。

翌1909年、ヘレラウでは、リーマーシュミートの設計になるドイツ工芸工房と住宅組合の住宅から建築が始まり、1911年には、159戸、1,000人、1913年には、386戸の住宅に、400家族、1,900人の住民が居住するまでになった。これらの住宅の設計には、リーマーシュミートのほか、ムテジウス、フィッシャー、テッセノウらがあたり、多彩な住宅設計をしているが、建築家が個人住宅を手がけることは、当時はまだめずらしいことだった。また、ヘレラウには、工房の職人だけではなく、一般の労働者、ドレスデンへ通勤するサラリーマン、公務員、芸術家、教師など社会各層の人々が混成して居住していたことも特色だ。

ドールンには、豊かな自然のもとで、職住が隣接した生活環境を目指すハワード流の田園都市構想のほかに、「独自の文化的な生活形態」を中核にした生活改革運動の拠点を作り、芸術家・文化人を引き寄せ、コミュニティの活力にするというもうひとつの目論見があった。そこで彼が白羽の矢を立てたのが、ダルクローズとリトミックだったのである。

ジュネーヴの音楽教師・作曲家エミール・ジャック＝ダルクローズは、音楽のリズムを出発点に、「文明に蝕まれた人間」をオイリュトミー、つまり身体と精神がバランスのとれた状態、自己と環境が調和した状態へ回復させようと考え、身体と音楽のリズムとの関係を観察して、音楽の進行を直接身体運動に移してリズム感を訓練するエクササイズを創り出し、当時、音楽教育改革として脚光を浴びていた。1909年10月末、ダルクローズは、ドレスデンでこのリトミックのデモンストレーションを行なった。ドールンはその時の印象をこう記している。「僕は、自分があらゆる生の

根源にせまっているように感じました。……まるで、切断された電気回路を再び繋ぐことができる箇所を、さがしあぐねた末によく見つけたような気がして、リズムによって運動する身体というこの体験を『これだ!』と直観したのです。」まもなくドールンはダルクローズにヘレラウにリトミック学校を設立したいと申し出る。この提案に対して、ダルクローズはこう答えている。「ベルリンとか他の大都市では、私は音楽学校しか作れないでしょう。しかし、ヘレラウでなら、リズムを社会の制度にまで高めることができます。」

デモンストレーションから1年後の1910年10月には、ダルクローズ学校がドレスデン市内の仮校舎で開校する。17ヶ国から115人の生徒が集まった。ドールンが開校の告知で謳ったことのひとつは、「修了後リトミック教師として自立可能なこと」だったが、それに応じるように、当時は限られていた自立の機会を得ようとする女性の入学者が多かった。マリー・ヴィグマンもそのひとりだった。また、ダルクローズがジュネーヴから連れてきたリトミック教師のなかには、マリー・ランバートや、ヴィグマンをラバンに引き合わせるようになるシュザンヌ・ペロツェットらもいた。

翌年、教育施設が完成し、学校はヘレラウへ移る。シンメトリックに配置された高く明るい空間のあるネオ・クラシックスタイルの教育施設は、建築家ハインリヒ・テッセノウの代表作のひとつだ。中央の祝祭劇場のステージは、ゴードン・クレイグと並ぶ20世紀初頭の演劇改革者アドルフ・アピアと画家アレクサンダー・フォン・ザルツマンによる斬新なデザインだった。ステージと客席を仕切るものではなく、ステージは、舞台装置や書き割りを廃して、積み木のようなブロックによって構成されていた。また、ザルツマンによる照明システムでは、光が三方の壁面と天井に張り巡らされた白い透光性のある帯状の布を通して和らげられ、使用される音楽のダイナミクスに雰囲気合うように調整されるという斬新なものだった。また、教育施設には、日光浴・大気浴場、水浴場などの自然療法的な設備も整っていた。ヘレラウの先端的な住宅や寄宿舎に住んだりリトミック教師や学生たちは、ゆったりとした服装で田園都市の街路を行き交った。

この祝祭劇場を使って毎年学年末に開かれたダルクローズ学校のフェスティバルは、パイロイト音楽祭と比較されるほど国際的な注目を浴びた。1912年には、応用リトミックのエクササイズとならんで、グルックの『オルフェウスとエウリディーチェ』やダルクローズのカンタータ『エコとナルシス』がリトミックで上演され、ドイツ内外から、500人を超えるジャーナリストと4,000人余りの観

客が集まった。翌年には、『オルフェウスとエウリディーチェ』の全幕が上演されている。このフェスティヴァルには、ディアギレフ、ニジンスキー、パヴロヴァ、ラフマニノフ、バーナード・ショー、クロードール、ラインハルト、ホーフマンスタール、ラバンをはじめ、5,000人を越える観衆が来訪した。こうしてヘレラウは、ドールンの目論見どおり、ドイツのみならず当時のヨーロッパの主要な舞踊、演劇、造形、音楽、文学の関係者たちが集散する場、まさに時代の先端に行く場となったのである。

この田園都市に引き寄せられたのは、西欧の人々ばかりではなかった。ヘレラウが最も華やかだった1913年、ベルリン滞在中の齋藤佳三は、山田耕作とともにヘレラウを訪れている。のちに耕筈は、自伝『若き日の狂詩曲』のなかでこう記している。「その年のいつ頃だったろう。私は齋藤とドレスデンに旅した。ジャック・ダルクローズの舞踊学校をヘレラウに見学するために。その見学は、私に指揮法に対するいい暗示を与えたばかりではなく、その後、石井漠と創始した『舞踊詩』の根底をなす力ともなつた。」

音楽、絵画はもとより、文学、舞踊、演劇、建築、デザインなど様々な芸術分野や思想の動向に敏感だった佳三にとって、この田園都市ヘレラウは、色々な意味で注目すべきもの、また、印象深いものだったに違いない。事実、この年、佳三は少なくとも2度にわたってヘレラウを訪れ、第一次世界大戦後の2度目の渡欧時にもここを訪れている。佳三にとってヘレラウは、単にダルクローズのリトミックにふれるばかりではなく、その教育施設をはじめ、当時の最新の住宅建築やシュミットの家具工場のデザインを確かめ、また、生活改革的な雰囲気や呼吸できる刺激的な場所だったに違いない。佳三は、帰国後の1920年、文部省の外郭団体として設立された「生活改善同盟会」調査委員にも就任している。

また、1913年秋には、佳三とともにベルリンへ到着していた伊藤道郎がヘレラウのダルクローズ学校に入学している。道郎は、343人の在学中ただひとりの東洋人学生だった。しかし、翌年、第一次世界大戦の開戦とともに「敵国人」となった道郎は、修了することなくヘレラウを去らざるを得なくなる。そして、脱出先のロンドンで、道郎は、ダンサーとして最初の成功をおさめることになる。そのときに踊ったのは、ダルクローズ学校で試験に備えて創作していたソロ・ダンスだったのである。

1912年7月、第一期生のヴィグマンは、リトミック教師の資格を取得して学校を修了し、ベルリンのダルクローズ学校でリトミック教師のポストに就くことが内定していた。このころ、ヴィグ

マンは、シュザンヌ・ペロテットからこんな話を耳にする。「私はダルクローズから離れて、素晴らしい創造をしているひとのところへ行くわ。そのひとは、まったく音楽を使わないで生徒たちを踊らせているの。」ペロテットは、過労で体調を崩し、ドレスデンのサナトリウム「白鹿」で療養生活をおくる間に、同じ「白鹿」に滞在していたラバンと知り合い、恋愛関係に入っていたのである。このペロテットの情報は、ヴィグマンがラバンのもとへ移るきっかけとなった。

ダルクローズは、表現力に乏しく音符のドリルとなって硬直していた当時の音楽教育に、身体を媒介にして新しい回路を開いた。彼は、生徒たちに、身体へ意識的に眼差しを向けることを教えた。彼にとってダンスとは、リズムカルな身体運動によってさまざまな感情を表現する芸術であり、また、音となったリズムを眼に見えるようにすること、音楽を造形的に身振りで再現することに他ならなかった。こうしたダルクローズのリトミック開発に少女の頃から実験台の役割を務めてきたペロテットは、「音楽を使わない」自律したダンスを実践するラバンを通して、身体運動が音楽に同期する他律的なリトミックに限界を感じるようになってゆく。ラバンに近い作家ハンス・ブランデンブルクは、そのエポックメーカーな著書『デア・モデルネ・タンツ』（1913）のなかで、ダルクローズのリトミックを舞踊の外延として大きく取り上げるいっぽうで、それが音楽に同期する他律性によって「袋小路」に陥っているとも指摘している。のちにヴィグマンは、ダルクローズ学校時代を振り返って、「私に関心があったのは、『さあ、あなたの身体でそれをいってみなさい』と言われたということだけだった」と冷ややかだが、「あなたの身体でそれをいってみなさい」と言う改革的な前段階がなければ、ラバンやヴィグマンのいう「ダンスの自律」もありえなかったのである。それにもまして、当時ヘレラウ以外のどこで体系的なダンス教育が行われていたのだろうか？

しかし、ヘレラウの華やかな時期は長続きすることはなかった。1914年、ヘレラウをめぐる状況は暗転する。まず、2月にヴォルフ・ドールンが休暇中に事故死する。リトミック学校の運営は、弟のハラルト・ドールンが引き継ぎ何とかその年度を終了するが、こんどは、ダルクローズがジュネーヴへ一時帰国している間に第一次世界大戦が勃発し、道郎のように多くの学生がヘレラウを去らざるを得なくなる。そして、開戦後まもなく、ドイツ軍がフランスのランス大聖堂を砲撃したことが報じられると、ジュネーヴに滞在中のダルクローズは、他のスイス・ロマンの芸術家たちとともに、「ラ・スイス」紙上に、「ジュネーヴ・プロテスト」と呼ばれる非難アピールを発表する。

反対に、ドイツ軍は、大聖堂を軍の監視所として利用していたフランス軍の交戦法違反を非難していた。しかし、スイスがフランス側に立ったため、ドイツのメディアは、「ジュネーヴ・プロテスト」に加わったダルクローズをはじめとするドイツに関係の深いアーティストたちに向け、後援者に対する「裏切り行為」、「ドイツ文化の中で過大評価された居候」などという攻撃を浴びせるようになる。事態を憂慮したハラルト・ドールンは、ダルクローズに抗議の撤回を懇願するが、ダルクローズは拒否して、ヘレラウとの契約は解消され、ダルクローズはジュネーヴでリトミック教育を継続することになる。

しかし、リトミック学校は田園都市ヘレラウにとっては看板の事業だった。翌1915年、ヘレラウでは新たに「リトミック・音楽教育協会」が設立され、教育施設は「新リズム応用学校」として再開され、1919年には、「リズムと音楽と身体教育のためのヘレラウ新学校」と改称される。この新しいリトミック学校の教育責任者となったエルンスト・フェラント＝フロイントは、ダルクローズ学校を卒業した優れた教師で、フェスティヴァルを再開するなど学校の再建に務め、ヘレラウの看板の維持をはかった。この時期の生徒の中からも、ロザリア・クラデク、イヴォンヌ・ゲオルギ、ハンヤ・ホルムなど、ドイツ表現舞踊の一翼を担うことになる人材が輩出されている。また、ハラルト・ドールンはフリースクール運動の提唱者アレクサンダー・サザランド・ニールのインターナショナルスクールを誘致するなどして事業の多角化を図っている。佳三がヘレラウを再訪したのも、石井漠が初めてそこを訪れたのもちょうどこの時期だった。

1925年、フロイント率いるリトミック学校は、ウィーン近郊のラクセンブルクへ移り、「ヘレラウ＝ラクセンブルク新学校」と改称され、ヘレラウからリトミック学校は姿を消した。この時期にはすでに、ルドルフ・ボーデヤ、ラバンの方法を取り入れながら、教育の重点は音楽から身体運動へと移っていた。その後、この「ヘレラウ＝ラクセンブルク新学校」も、1938年、ナチスのオーストリア併合とともに閉鎖となった。

ドイツ再統一後に始まった田園都市ヘレラウの再評価は、2007年9月の祝祭劇場の改修工事の終了でひとつの節目を迎えた。そのオープニングを飾ったのは、ヘレラウを活動の拠点のひとつに選んだ舞踊家ウィリアム・フォーサイス率いるフォーサイス・カンパニーの公演だった。新たにヘレラウに設立された「ヨーロッパ芸術センター」やフォーサイスの活動は、21世紀のヘレラウを文化・産業遺産以上のどのような場にすることができるのだろうか？

主要参考文献

- ・山名淳：夢幻のドイツ田園都市 — 教育共同体ヘレラウの挑戦、ミネルヴァ書房、2006
- ・日本ダルクローズ音楽教育学会：リトミック研究の現在 — 日本ダルクローズ音楽教育学会創立30周年記念論文集、開成出版、2003
- ・京都国立近代美術館（編）：クッションから都市計画まで — ヘルマン・ムテジウスとドイツ工作連盟：ドイツ近代デザインの諸相、1900-1927、京都国立近代美術館、2002
- ・長谷川章：世紀末の都市と身体 — 芸術と空間あるいはユートピアの彼方へ、ブリュッケ、2000
- ・セゾン美術館（編）：バウハウス 1919-1933、セゾン美術館、1995
- ・エミール・ジャック＝ダルクローズ：リズムと音楽と教育 — リトミック論文集、全音楽譜出版社、1986
- ・フランク・マルタン他：エミール・ジャック＝ダルクローズ、全音楽譜出版社、1977
- ・Winfried Nerdinger: *100 Jahre deutscher Werkbund 1907-2007*, Prestel, 2007.
- ・Eric Toepfer: *Empire of ecstasy*, University of California Press, 1997
- ・Songrid Hürtgen-Busch: *Die Wegbereiterinnen der rhythmisch-musikalischen Erziehung in Deutschland*, dipa-Verlag, 1996.
- ・Giorgio J. Wolfenberger: *Suzanne Perrottet - Ein bewegtes Leben*, Quadriga Verlag, 1995
- ・Hedwig Müller, Patricia Stöckemann: *„... jeder Mensch ist ein Tänzer“ - Ausdruckstanz in Deutschland zwischen 1900 und 1945*, Anabas Verlag, 1993
- ・Klaus-Peter Arnold: *Vom Sofakissen zum Städtebau - Die Geschichte der Deutschen Werkstätten und der Gartenstadt Hellerau*, Verlag der Kunst, 1993
- ・Gunhild Oberzaucher-Schüller: *Ausdruckstanz - Eine mitteleuropäische Bewegung der ersten Hälfte des 20. Jahrhunderts*, Florian, 1992
- ・Wolf Dohrn: *Die Gartenstadt Hellerau und weitere Schriften*, Hellerau-Verlag, 1992
- ・Winfried Nerdinger: *Richard Riemerschmid - Vom Jugendstil zum Werkbund*, Prestel, 1982
- ・Joan Campbell: *The German Werkbund - The Politics of Reform in the Applied Arts*, Princeton University Press, 1978
- ・Hans Brandenburg: *Der moderne Tanz, zweite, vermehrte Auflage*, Georg Müller, 1913